

改訂の序

さて、本書の初版はそこそこ売れたそうで、改訂版刊行の運びとなった。ITナイフによるESDや本書に関する私の思いは、初版の序文に書いたことがすべてであり、特に付け加えることもない。と言ってしまえば身もふたもないで、少し宣伝めいたことを考えてみる。初版から現在まで、ITナイフについてのsomething newは、食道や大腸に適したITknife nanoが発売されたことが挙げられよう。改訂版ではITknife nanoを用いたESD症例がいくつも加わった。また、偶発症に対するOTSCやネオベールの登場、デンタルフロスを用いた糸付きクリップによるESDなどのちょっとした工夫により、ESDはより進化しつつある。

新たな症例への差し替えも行われ、初版をお持ちの方でも財布に余裕があれば、ちょっと購入してみようかと思っていただける内容と言える（かもしれない）。

個人的にはESDの登場のような、大きなbreakthroughが起こってほしい。そうしたら私も新しい手技を必死に身につけよう。若い医師にかなわなければ教えを請い、それでもだめなら、「これからは君たちの時代だよ」と偉そうに言いながら、陰でこっそり練習しよう。

本書にてITナイフを用いたESDを新たに始められた若い医師がいらっしゃれば、次の展開を目指して精進してほしい。

2015年2月

静岡県立静岡がんセンター内視鏡科
小野裕之

初版の序

羊土社から本書の編集の依頼があった時、すでに類書、良書が多数出版されており、あえて新しい書籍を出版する意味があるだろうか、と今ひとつ乗り気ではなかつたのが正直なところだった。だが、ITナイフが世に出てすでに10年以上経過し、ESDも思いもよらない速さで日本中に広まつた。一度くらいITナイフ中心の技術書を出しててもいいかな、と考え直した。

1996、'97年頃だったろうか、ITナイフの生みの親の細川浩一先生も病院を移られ、後藤田卓志先生もまだレジデントになりたてだった。ITナイフによるESD（当時は「ESD」という用語もなかった）は、毎日毎日、出血、穿孔、分割切除ばかり、時に緊急手術と、レジデントだった乾 哲也先生に、後年「到底ものにならないと思った」と告白されたくらいである。国立がんセンター中央病院の内視鏡治療室で血だらけのESDを見ていた欧米人医師が腕を広げ、肩をすくめて内視鏡治療室を出て行き悔しい思いをしたこともあった。止まらない出血に「外科に頼め」と近藤仁先生に後ろから肩をたたかれたこともあった。

回顧談はともかく、ESDは今や早期胃癌、食道表在癌の標準治療の一つとなり、ITナイフ2もオリジナル以上に優れたデバイスである（自画自賛）。本書は基礎編において診断およびESDの基本、そして実践編のcase studyでITナイフによるESDを解説した。理解の助けとして一部は動画でご覧いただけるようになっている。

執筆陣は主として、国立がんセンター中央・東病院、静岡県立静岡がんセンターでスタッフ、レジデント、研修医として私たちと仕事をした、現在現場でばりばり仕事をされている方々である。第一線で働いているからこそいろいろなKnacksが満載され、明日からすぐに皆さんの役に立つはずだ。私もいくつかはこっそり明日から試そうと思っている。ちなみに吉田茂昭先生、斎藤大三先生、下田忠和先生をはじめ、私たちを暖かく、文句もたまにしか言わず見守ってくださった先輩たちには、楽しく、ためになるコラムを執筆していただいた。他の先輩たち、今では化学療法、臨床試験の重鎮となっている方々が、かつて内視鏡屋さんだったことに、私たち内視鏡屋は大きな誇りをもっている。ITナイフによるESDの開発と展開は先輩たち、外科医たち、同僚、後輩たちが皆で推し進めたものであるが、それでも私個人として大変お世話になったことを感謝申し上げたい。

案の定、原稿が一番最後になった私を叱咤し、何とか本書が刊行できたのも羊土社の鈴木美奈子さん、林理香さんのご努力の賜物であることを書き添える。

本書により、ITナイフの魅力に気づかれんことを祈念する。

2009年5月

静岡県立静岡がんセンター内視鏡科
小野裕之